

社会技術研究開発事業
令和6年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」

「若者と共に創る孤独予防戦略：コプロダクションによる
若者の孤独の理解と予防法の創出」

山崎 修道

東京都医学総合研究所 副参事研究員

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2-1. 研究開発目標.....	2
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン	2
2-3. ロジックモデル.....	3
2-4. 実施内容・結果.....	4
2-5. 会議等の活動.....	15
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	17
4. 研究開発実施体制	18
5. 研究開発実施者.....	20
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	22
6-1. シンポジウム等.....	22
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	25
6-3. 論文発表.....	28
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	29
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等.....	29
6-6. 知財出願.....	30

1. 研究開発プロジェクト名

若者と共に創る孤独予防戦略：コプロダクションによる若者の孤独の理解と予防法の創出

2. 研究開発実施の具体的内容

2-1. 研究開発目標

本プロジェクトでは、以下の目標を達成する。

まず、①若者とのコプロダクションにより、孤独の原因となり、かつ変容可能な環境要因を当事者視点から質的分析を用いて明らかにする。若者の生活時間の大半を占める学校環境に焦点を当て、学校環境の何がどのように若者の孤独感に影響するのかを若者の視点を踏まえた上で解明する。

次に、②思春期コホート研究で蓄積されたバイオマーカーを含む時系列ビッグデータを用いて仮説を検証する。バイオマーカーを含む様々な個体要因を統制した上で、社会環境が孤独に及ぼす影響を因果関係解析モデル（Directic Acyclic Graph Model：DAGモデル）を構築して分析する。DAGモデルの構築は、既存研究の知見を基にするだけでなく、若者の視点を取り込むために若者と協働で進め、孤独の一次予防に実装可能な要因を抽出して検証する。

①②で得られた知見を基に、若者を取り巻く社会環境、特に学校環境への有効な介入点を定め、学校環境の改善が、孤独の一次予防にもたらす波及効果を確認する。実施に当たっては、初年度に都立高校1校をモデル校として学校環境改善の取り組みを試行し、教員および生徒、地域支援者を含めた学校環境改善プログラムの社会実装へ向けた概念実証を進める。

本プロジェクトは、①現代の若者の当事者の視点からスタートし、②ビッグデータによる裏付けを行った上で、③介入研究により孤独予防への効果を実証する。

2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

- Q1. 若者の孤独の原因となり、かつ変容可能な環境要因は何か？
- Q2. 若者の生活時間の大半を占める学校環境の何がどのように若者の孤独感に影響するのか？
- Q3. 学校環境の改善が、孤独の一次予防に波及効果をもたらすのか？

2-3. ロジックモデル

SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム (社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築) 「若者と共に創る孤独予防戦略：コプロダクションによる若者の孤独の理解と予防法の創出」ロジックモデル

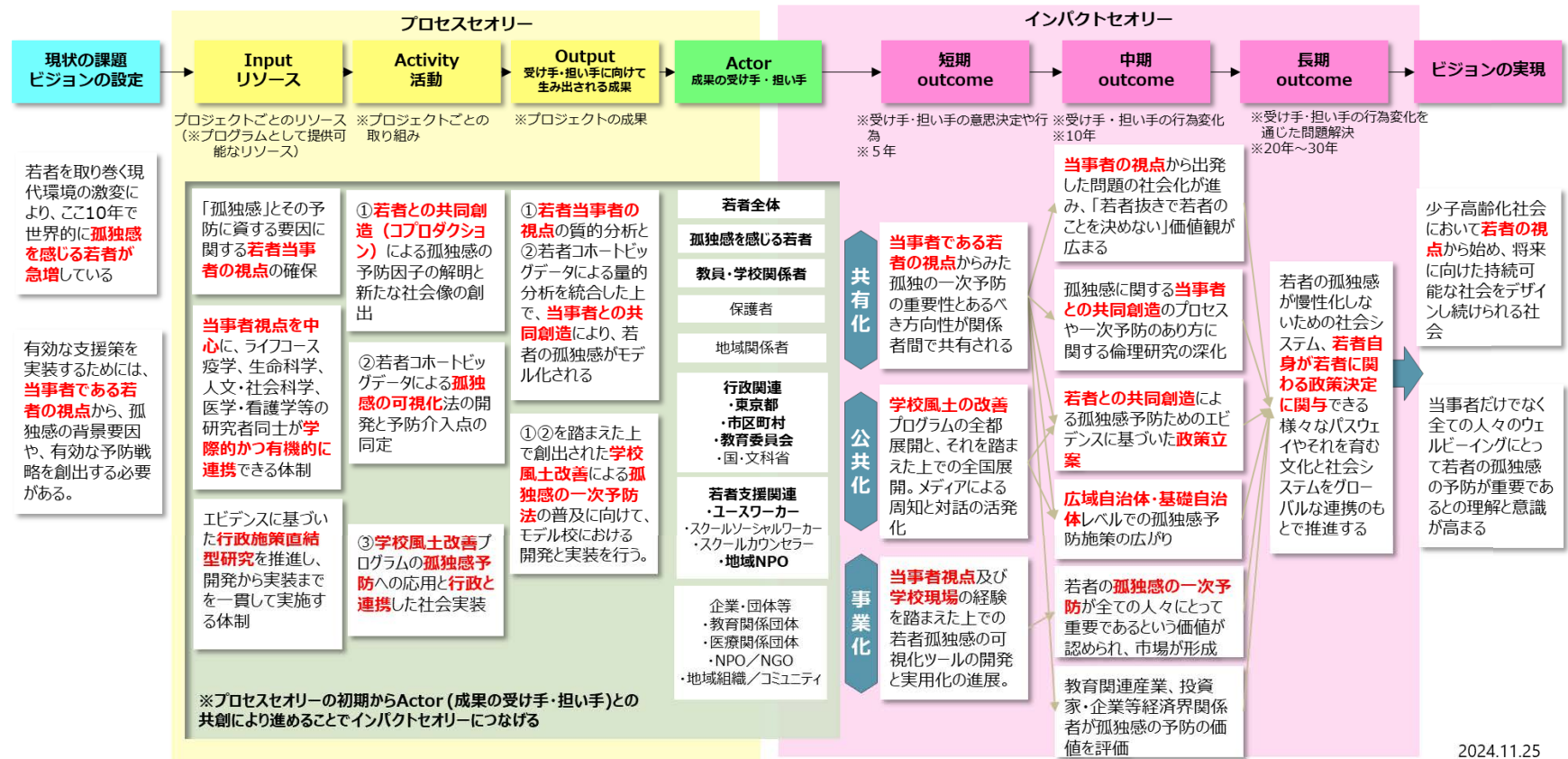


図1 本研究開発事業におけるロジックモデル

2-4. 実施内容・結果

(1) スケジュール

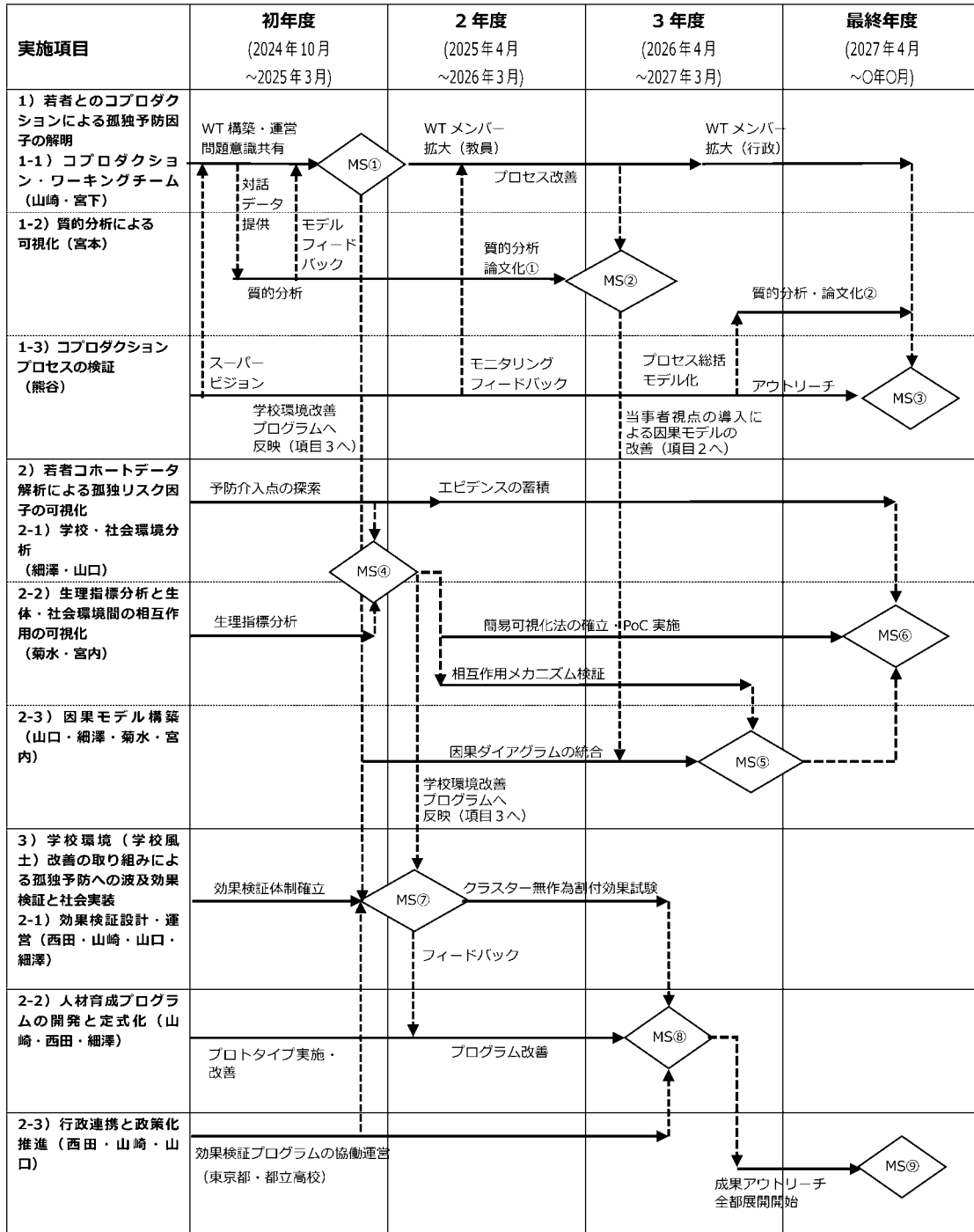


図2 本研究開発事業のスケジュールとマイルストーン

(2) 各実施内容

令和6年度では、以下の到達点を目指し、計画を進めた。

- ・若者とのコプロダクション・ワーキングチームを立ち上げ、孤独予防因子を当事者視点から明らかにする。
- ・大規模出生コホートから得られたビッグデータを用いて、孤独感を予測する社会環境要因と生理指標を分析し、結果を統合して疫学的エビデンスに基づいた因果モデルを構築する。
- ・学校風土の改善の取り組みが、若者の孤独感をどのように軽減するのか、孤独予防への波及効果を検証し、エビデンスに基づいた孤独の一次予防法を確立するため、モデル校において取り組みの導入と普及に向けた体制を確立する。

具体的には、「(1) スケジュール」に示した計画に沿って、以下の研究開発項目1～3を実施した。

研究開発項目1：若者とのコプロダクションによる孤独予防因子の解明

- ・コプロダクションチームの対話分析と仮説モデルの生成

研究開発項目2：若者コホートデータ解析による孤独リスク因子の可視化

- ・若者コホートデータによる孤独のリスク因子の可視化と因果モデル構築

研究開発項目3：学校環境（学校風土）改善の取り組みによる孤独予防への波及効果検証と社会実装

- ・学校風土改善プログラムの導入体制確立

上記の研究開発項目に沿って、令和6年度は以下の項目を実施した。

実施項目1：コプロダクションチームの対話分析と仮説モデルの生成

・若者コホート参加者10名程度によるコプロダクション・ワーキングチームを立ち上げ、コプロダクションプロセスのスーパービジョンを受けつつ、質的分析による仮説モデル生成を開始する。得られた知見は随時、項目3の学校風土改善の取り組みと人材育成プログラムの開発に反映させる。

実施項目2：若者コホートデータによる孤独のリスク因子の可視化と因果モデル構築

・大規模出生コホートから得られたビッグデータを用いて孤独感を予測する社会環境要因の中でも、特に学校に関連する要因について集中的に分析を行い、予防介入点の探索と同定を行う。また、生理指標の中でも、社会環境との相互作用により孤独の可視化につながる可能性が高い腸内細菌叢と内分泌（ホルモン）に焦点を当てた解析を行う。これらを統合し、孤独の因果関係ダイアグラム（Directic Acyclic Graph : DAG）の構築に着手する。また、得られたエビデンスのうち、学校環境に特に関連する知見については、項目3における学校環境改善の取り組みにおける実践内容及び人材育成プログラム開発の際に共有し、孤独予防への波及効果の検証を通じてPoCを実施していく。

実施項目3：学校風土改善プログラムの導入体制確立

・学校風土改善プログラムのランダム化比較試験の開始に向けて、人材育成プログラムのプロトタイプを作成、実施し、改善を進める。プログラムは、SEHERプログラムの人材育成プログラムに基づいて作成する。人材育成プログラムの実施に際しては、項目1のコプロダクション・ワーキングチームの質的分析及び項目2の大規模データによる量的分析の結果を踏まえる。コーディネーターは、孤独の予防にあたって学校環境のどこにどのように着目すべきか、エビデンスと当事者視点に基づいた知見を活用し、さらに改善を進める。モニタリングシステムと人材育成プログラムを確立し、クラスター無作為割付効果試験に向けた孤独の一次予防パッケージを確立する（マイルストーン⑦）。

・モデル校での効果検証に向けたプロセスは、東京都子供政策連携室及び東京都教育庁との緊密な連携の下進め、現場との調整を図りながら進めていく。具体的には、まずモデル校2校（高校1校・中学校1校）を対象に、学校風土改善プログラムのスキーム構築のための試行を行う。1校（高校）は既に学校風土の可視化調査を実施済みであり、9月よりコーディネーターを導入する予定である。もう1校（中学校）は、9月以降に学校風土可視化調査を実施し、教職員への説明会、コアチームでのディスカッションを経て、2025年1月（3学期）よりコーディネーターを導入し、プログラムを試行していく予定である。モデル校での試行実績を踏まえて、東京都及びコホート調査協力自治体と連携し、実践導入校を募集する。現時点で5校～10校程度を目標とする。不登校対策と教員の働き方改革という現場のニーズを踏まえた上での募集を行政関係者と協力して実施する。導入の際には、管理職・現場コアチーム・全教職員の3層に対して説明会を実施し、現場の理解を得た上で開始する。

（3）成果

実施項目1：コプロダクションチームの対話分析と仮説モデルの生成

令和6年度は、若者コホート参加者（20歳前後）とのコプロダクションを行うワーキングチームを立ち上げ、現代の若者の孤独感と、孤独感に影響する要因についてディスカッションを進めた。事業開始前の2024年8月より現在までに、14回実施し、延べ39名がディスカッションに参加した。ワーキングチームでは、若者の意見を引き出す環境を整えた上で、様々なワーク・アクティビティを行い、研究者とフラットな立場でディスカッションが行えるよう、権力勾配に配慮した上で議論を進めた。立ち上げに際しては、ワーキングチームメンバーのリクルート及びマネジメントを山崎・宮下が中心となって行った。ミーティングを進めるにあたって、そのプロセスを当事者との共同創造の経験が豊富な熊谷・宮本及び研究協力者の東京大学先端科学技術センターの綾屋准教授と週次ミーティング（全17回）にて詳細にわたって共有し、共同創造における留意点や権力勾配に配慮した場づくり、可視化を促すワーク等についてスーパービジョンを受けながら進めた。

具体的には、孤独感をテーマにしたワークを3種類（①孤独感のポジティブ／ネガティブな面の割合を数値化し、言語化する。②孤独感を中心に66の代表的な感情語をマッピングする。③孤独を感じる／感じないキャラクターを挙げ、要素を可視化する。）を行い、現代の若者の孤独感と孤独感に影響する要因について言語化・可視化する機会を設けた。また、若者の孤独感に影響する要因のうち、SNS 使用に焦点を当てた先行研究で研究者から提示

された仮説に対して、当事者の視点から仮説の妥当性を評価した上で、若者における SNS 使用と孤独感の増加についてディスカッションを深めた。ディスカッションにおける質的データを研究者間で共有し、因果モデル構築に向けた質的分析を開始した。

全12回の若者とのミーティングのうち2回(24年11月4日、11月9日)は、英国キングスカレッジロンドンのGemma Knowles講師及びDaniel Stanyon研究員も参加し、英国での若者との共同創造の経験を共有しながらミーティングセッションを行った(図3)。セッションでは、①アイスブレイクと関係構築、②プロジェクト全体の目的と問題意識の共有、③若者の孤独感に与える社会環境、特にSNSとの関係についての先行研究の共有と若者の視点での批判的検討、④東京ティーンコホートのデータ分析結果の共有とその解釈についての検討を行った。その結果、①研究者及び年長世代の解釈と若者当事者による解釈の共通点と相違点が明確化され、今後大規模コホートにおける分析や、学校環境における介入プログラムにおいてフォーカスすべきポイントが見えてきた(例1：SNSが内集団と外集団をデジタルに分けてしまい、対面の関係のようなグレーな関係性が少なくなり、若者同士の信頼関係構築が難しくなり得ること、例2：SNSの使用制限だけでは対策として不十分であり、SNS使用を加速させる背景要因として孤独感を捉える必要があること)、②SNS・ネット環境が、若者世代間でもこの数年の間に加速度的に変化しているため、より当事者視点を丹念に拾い上げることが重要であることが改めて確認出来た(例：LINEからInstagram、Be realへと優勢なプラットフォームが目まぐるしく変化している)、③そのような環境の激変の中でも、若者自身が試行錯誤しつつ、成長と共に若者自身の手でSNSと上手く付き合う方法を身に付けてきた体験(例：「中学時代は最も荒れていたが、高校・大学になるとだんだん落ち着く。」)等が見えてきており、今後学校環境改善プログラムにも活用できる知見が当事者との共同により得られてきている。

英国キングスカレッジロンドンチームとは、オンラインでも定期的にミーティングを行い、若者コプロダクショングループのプロセスの共有とスーパービジョンの機会を設けた。また、思春期コホートデータを用いた国際共同研究の可能性についても引き続きディスカッションを行った(全14回)。

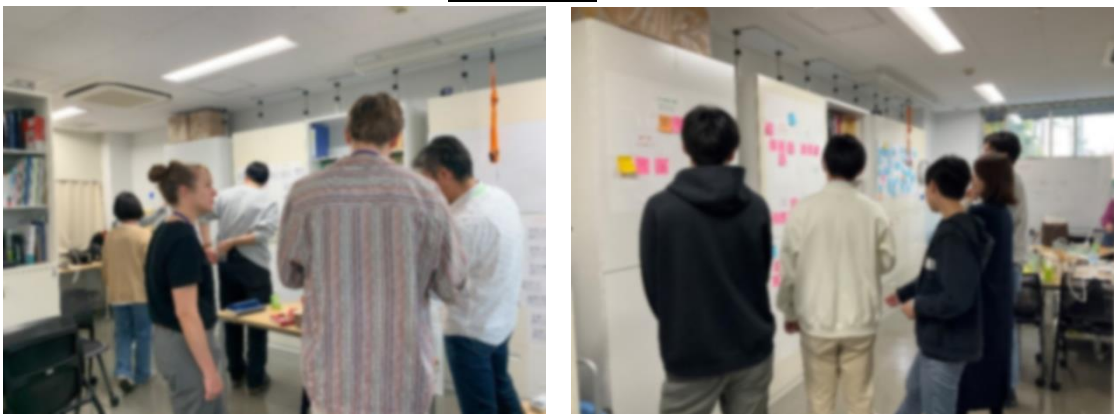


図3 若者コホート参加者とのコプロダクション・ワーキングチームの様子

実施項目2：若者コホートデータによる孤独のリスク因子の可視化と因果モデル構築
令和6年度は、チーム内で毎月ミーティング(全6回)を行い、データセット及び解析結果を共有し、因果モデル構築に向けたディスカッションを進めた。まず、学校風土の良い

学校生活を送っていた若者は、コロナ禍であってもメンタルヘルスが悪化せず、維持されていたことを確認した。この結果は、*Psychological Medicine*誌に公表し、プレスリリースを行った (Yamaguchi 2024)。次に、若者コホート研究で蓄積された時系列縦断データの中から、先行研究等で孤独感との関連が示唆されている社会環境要因を抽出し、孤独感との関連について予備的な解析を進めた。その結果、学校風土や地域の人間関係と若者の孤独感の間に有意な関係が見出された。並行して生物学的要因についても分析を進め、14歳の尿中クレアチニン／握力比が16歳の孤独感を有意に予測することを見出した。

このような結果を踏まえた上で、学校風土の指標にも含まれる教員 (担任・校長) との信頼関係と孤独感の関係、及び先行研究で示唆されている SNS 使用と孤独感の関係について、クロスラグパネルモデル (CLPM) による因果関係の検証を行った。その結果、①女子において12歳の孤独感が強いと、14歳のSNS使用頻度が多くなること、②教員との信頼関係と孤独感の間には双方向の関係性があることが示唆された。引き続きより因果関係に踏み込んだ精緻な解析 (ランダム切片クロスラグパネルモデル: RI-CLPM 等) を進め、孤独感を予測する因果モデルを構築し、項目1の若者とのコプロダクション・ワーキングチームも交えて、当事者経験を踏まえた解釈及び介入可能性について議論を進める。また、得られた知見を項目3の学校風土改善プログラムの介入内容や、コーディネーターの研修に反映させる予定である。

実施項目3：学校風土改善プログラムの導入体制確立

令和6年度は、以下の日程で順次モデル校2校を対象にプログラムの導入を進めた。まず、学校風土を可視化するための「学校風土測定システム」を導入した。モデル校2校では、現在までに教職員コアチームの活動を週1回継続し、生徒コアチーム (居心地向上委員会) の活動を開始した。

【先行モデル校A校 (都立高校チャレンジ校) での進捗】

先行モデル校A校 (都立高校チャレンジ校) では、初回の学校風土調査 (6/12) と調査結果のフィードバック (7/11)、2回目調査 (11/1) とフィードバック (11/21) を完了し、初回から2回目にかけて、学校風土得点が改善していることを確認した。

教職員コアチーム (校長・教頭・生徒指導教員・生徒会担当・養護教諭・東京都担当者・都医学研研究者)では、都医学研及び東京都子供政策連携室スタッフのサポートの下、週1回30分～1時間のミーティングをこれまでに24回 (24年10月～20回) 実施し、綿密な打合せを経てプログラムの導入を進めた。

全校生徒へ生徒コアチームの募集 (10/23)を行い、生徒コアチーム (居心地向上委員会: 約20名) を結成 (11/12)。3月までに12回ミーティングを実施し、学校風土改善のための具体案を学外から派遣された若者コーディネーター (通称「ミトラ」=ヒンドゥー語で「友人」の意味) と共に共同創造し、教職員コアチームと合同ディスカッションを行った。学外の若者コーディネーターは、生徒コアチーム募集時 (10/23: 全校集会) に全校生徒に紹介した後、週1回半日モデル校へ滞在し、生徒コアチームのファシリテーションを実施し、教職員コアチームとのミーティングにも参加した。また、教職員対象ワークショップ (10/26)を実施し、教職員への活動の周知と啓発を行った。現在生徒発信による8つの居心地向上プロジェクトが進行中である (図4)。

【先行モデル校B校（都立中高一貫校前期（中学校））での進捗】

先行モデル校B校では、教職員コアチームとのミーティングこれまでに16回（24年10月～14回）実施し、先行モデル校A校で得られたノウハウを元に、初回学校風土調査(10/11)と調査結果フィードバック(11/7)、全教職員への説明会(12/19)、教職員対象ワークショップ(12/25)及び生徒コアチーム募集(1/20～)を行い、生徒コアチーム(8名)を結成(1/29)。3月までに5回ミーティングを実施した。

【その他進捗】

プログラム開発者のハーバード大学ヴィクラム・パテル教授とオンラインミーティングを8月より4回（8/22・11/18・12/23・1/8）実施し、効果検証デザイン・プログラム内容・人材育成プログラム等多岐に渡るスーパービジョンを受け、次年度以降のクラスター無作為化効果試験に向けた準備を進めた。

東京都知事によるこども未来会議(12/20：事務局 子ども政策連携室)に出席し、学校風土に関する啓発と本プログラムの周知を都民・有識者を対象に幅広く行った。

東京都子ども未来アクションとして、学校の居心地向上プロジェクトについてデジタル版のリーフレットを作成し、東京都子供政策連携室のウェブサイトより広く都民へ周知を図った（図5～図9）。



図4 モデル校の生徒コアチームにおけるディスカッションの可視化

学校の居心地向上

推進
チーム

子供政策連携室・保健医療局・教育庁

学校風土を改善し、子供が直面する様々な問題の発生を未然に防ぐ仕組みを構築

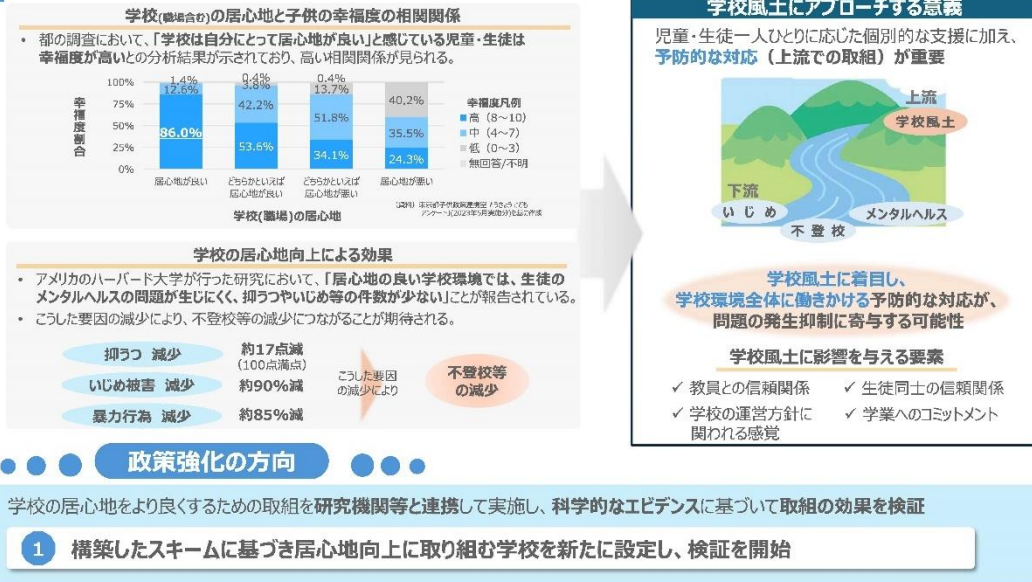


図5 東京都子ども未来アクション：学校の居心地向上（風土改善）がなぜ必要か？

2024年度の取組 モデル校での実践を通じて、検証スキームや学校での実践プログラムを構築

- 2024年1月に東京都医学総合研究所（医学研）と協定を締結し、プロジェクトを始動
- モデル校である都立小台橋高等学校及び都立立川国際中等教育学校での実践を通じて、東京モデルを構築

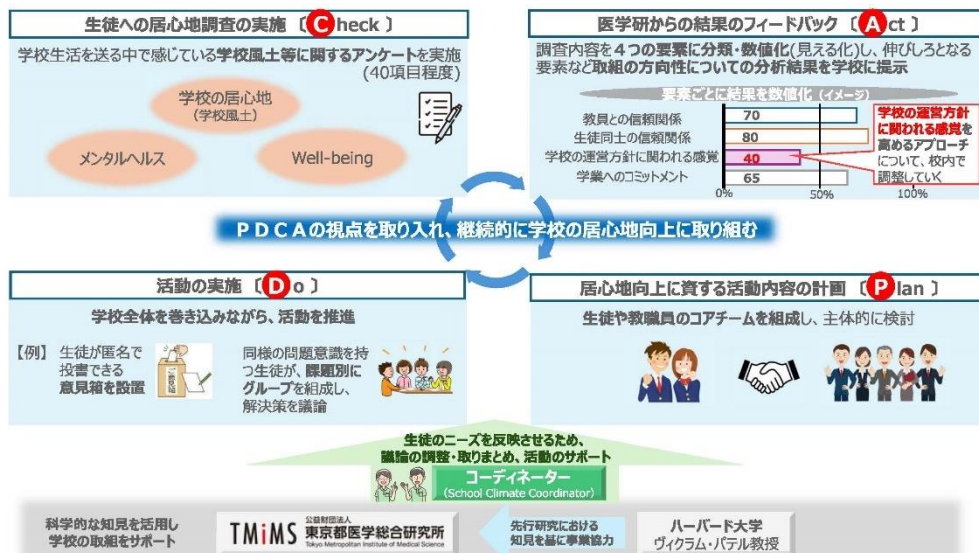


図6 東京都子ども未来アクション：学校の居心地向上に向けた東京モデル

今後のアクション

1 構築したスキームに基づき居心地向上に取り組む学校を新たに設定し、検証を開始

学校の居心地向上に向けた取組 (学校の居心地向上検証プロジェクト/子供政策連携室) **新**

高等学校・中学校での取組

- ▶ 都教育委員会や区市町村教育委員会と連携し、都内の高等学校3校及び中学校4校を新たに設定、取組を実施
- ▶ 東京都医学総合研究所の知見を活用し、統計学的・科学的に信頼性の高い手法を採用
学校の居心地向上検証プロジェクトのスキームに基づき居心地向上に取り組む学校群と、取組を実施しない学校群とを比較することで、取組の有効性を評価

小学校での取組 (スキーム検討に着手)

- ▶ 小学生向けの居心地調査*を開発するなど、高等学校・中学校に適用するスキーム等を踏まえ、小学校を対象としたスキーム等を検討
* 設問数の削減や平易な表現への変更など、中高生とは異なるアプローチが必要と想定
- ▶ 児童の成長・発達段階に応じたきめ細かな制度設計など、取り組む上での課題を整理

3か年のアクション (主要)

具体的な取組	2024年度末 (見込み)	年次計画		
		2025年度	2026年度	2027年度
高等学校・中学校での取組	取組スキームの構築	取組の効果検証・事業展開の検討		
小学校での取組		調査手法の検討	取組スキームの構築	取組の効果検証

図7 東京都子ども未来アクション：学校の居心地向上に向けた今後のアクション

これまでのアクション

モデル校における取組

校内気運の醸成に向けた取組

モデル校である都立小台橋高等学校では、生徒や教職員への説明会やワークショップの開催等により、学校全体で取組気運を醸成し、プロジェクトを推進しています。



プロジェクトについての教職員への説明
居心地調査の実施に先立ち、教職員全体にプロジェクトの意義等を説明



教職員向けのワークショップ
学校の居心地向上に取り組むに当たり、教職員・生徒・コーディネーターそれぞれの立場における留意点等を学ぶ



生徒への説明とコアメンバーの募集
全校生徒に説明し、生徒意見の取りまとめなど中心的な役割を担うメンバーを募集

「学校の居心地と生徒のメンタルヘルスとの関係」をテーマに、こども未来会議を開催！

第13回こども未来会議 (2024年12月20日開催) において、東京都医学総合研究所の西田淳志先生をプレゼンターに迎え、小池知事や各委員との意見交換を行いました。

～ 会議での主なコメント ～

委員

- ✓ 生徒が学校の運営に積極的に関与できる、意見を表明できるということは、子どもの権利条約の観点から見ても大変重要
- ✓ 居心地の良い学校を作っていくために、子供たちが互いの主体性を引き出し合い、それを具現化していく重要な取組

知事

- ✓ 今、不登校が増えており、小学校一年生から不登校の児童もいる。学校風土の改善といった新たな視点での取組を進めていきたい。



※実際の発言に基づいて記載

先行研究をリードする ハーバード大学のヴィクラム・パテル教授にもご協力いただいています！

- ✓ 2024年3月、プロジェクトを開始するに当たり、都立小台橋高等学校において、自身の研究成果についての講演や、学校管理職との意見交換を実施していただきました。
- ✓ こども未来会議へもビデオメッセージを寄せていただき、都がプロジェクトを推進することへの期待等をお話しいただきました。



ヴィクラム・パテル教授




小台橋高等学校での講演・意見交換

図8 東京都子ども未来アクション：モデル校での具体的な取組/こども未来会議

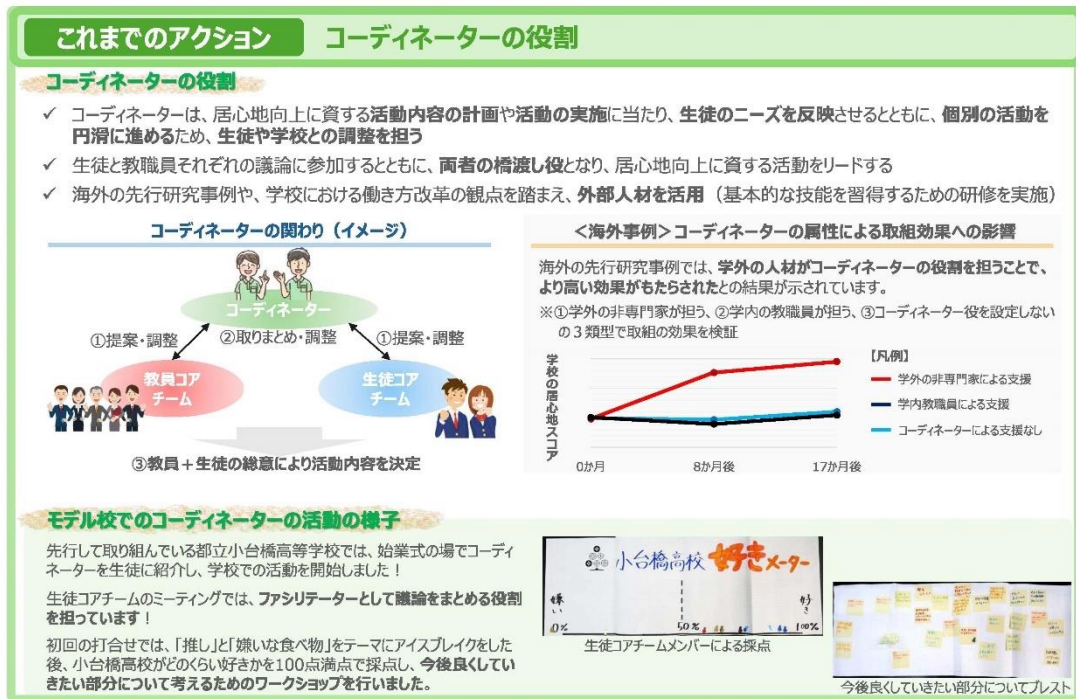


図9 東京都子ども未来アクション：コーディネーターの役割と実際の活動

(4) プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

Q1. 若者の孤独の原因となり、かつ変容可能な環境要因は何か？

<明らかになったこと>

令和6年度の成果から、学校風土が若者の孤独の主要な原因となり、かつ変容可能な環境要因として主要な位置を占め得ることが改めて確認出来た。中でも、学校教員との信頼関係と孤独感の間には双方向の関係性があることが明らかになった。また、SNS使用と孤独感の関係については、思春期早期（中学生：12～14歳）では、孤独感がSNS使用に先行することが示された。これらの関係は、縦断データを用いたクロスラグパネルモデルにより、より因果関係に近い形で示された。また、これらの関係は、男子よりも女子において顕著であることが明らかとなった。この男女差については、若者当事者とのディスカッションにおいても、主要なテーマとなっており、オンライン／オフラインでの人間関係の複雑さが、孤独感のジェンダーギャップに影響を与えている可能性も示唆された。

<さらに検討を深めるべき課題>

SNSと孤独感の関係については、世界的な課題であり、かつ若者自身の問題意識も強いことから、今後更に深掘すべきテーマである。特に、女子において顕著な関係が見出されていることから、孤独感のジェンダーギャップ（Loneliness gender gap）についても、更に検討を進めるべきだと考える。その際、社会環境要因と同時に、ホルモ

ンや運動・筋肉量・腸内細菌叢などの生理的要因との関連も同時にモデルに組み込むことで、環境要因の影響についてよりクリアに示すことが可能となるだろう。令和7年度以降、コホートデータによる可視化をさらに進め、介入ターゲットとなり得る主要な要因の絞り込みを続ける必要がある。

Q2. 若者の生活時間の大半を占める学校環境の何がどのように若者の孤独感に影響するのか？

<明らかになったこと>

令和6年度の成果から、学校環境の中でも教員、特に校長との信頼関係が、孤独感を抑制する効果を持つことが大規模コホート分析から明らかになった。校長は学校組織のトップリーダーであり、組織の風土を左右する極めて重要なキーパーソンでもある。校長のリーダーシップが、学校風土の改善に寄与し、その結果として生徒のエンジェンシーや生徒同士の信頼関係が高められ、生徒の孤独感を抑制している可能性も考えられる。

<さらに検討を深めるべき課題>

今後は、校長・教員との信頼関係が、どのようなメカニズムにより孤独感の予防につながるのか、そのプロセスについて若者とのディスカッションから質的な分析を進めつつ、量的データにより検証可能な仮説を構築していくことが必要になる。その上で、校長・教員と生徒の信頼関係そのものを促進する環境要因について、さらに検討を進め、学校改善プログラムに応用していくことが課題である。この点については、コホートデータによる探索的解析のみならず、若者当事者とのディスカッションや、学校風土改善プログラムにおけるアクションリサーチ等を通じて見出していくことが可能である。令和7年度以降は、上記の点について更に検討を深め、実践にも導入しつつ確認していく必要がある。

Q3. 学校環境の改善が、孤独の一次予防に波及効果をもたらすのか？

<明らかになったこと>

令和6年度の成果から、学校風土の良い学校生活を送っていた若者は、コロナ禍であってもメンタルヘルスが悪化せず、維持されていたことが明らかになった。孤独感とはメンタルヘルスの悪化と密接な関連を持つため、より良い学校風土が孤独感を予防する可能性は非常に高いと考えられる。また、学校環境改善プログラムを導入したモデル校では、学校風土の改善傾向が見られたのと同時に、生徒のウェルビーイングの改善も見られた。

<さらに検討を深めるべき課題>

令和7年度以降は、学校環境の改善が孤独の一次予防にもたらす波及効果について、効果検証データによる確認が必要となる。また、媒介分析等により、学校環境の何がどのように変化して、どのような経路で孤独感の抑制に寄与したのかを更に分析していく必要がある。そのためには、若者とのコプロダクションミーティングにおいて、ディスカッションやインタビューを通じて質的データをさらに収集し、学校風土と孤独感の間の因果モデル仮説を構築していく必要がある。

(5) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

①達成目標に対する進捗状況

おおむね順調に推移しており、一部計画以上に進捗している。本申請課題の進捗に伴い、英国キングスカレッジとの国際共同研究が更に進展し、若者のメンタルヘルス・ジェンダーギャップの解決に向けた大型国際共同プロジェクトが、英国ウェルカム財団の支援の下令和7年度4月より開始することが決定した。

また、東京都子供政策連携室への予算措置が決定し、学校の居心地向上検証プロジェクトが、東京都子ども政策のリーディングプロジェクトに位置付けられた。

(<https://www.kodomoseisaku.metro.tokyo.lg.jp/jigyo/suisin-team>) 加えて、東京都子ども未来会議（都知事出席：2024年12月20日）において、西田グループリーダーが学校の居心地と若者のメンタルヘルスについて話題提供を行い、学校風土の重要性と学校風土改善プログラムの周知を都民・行政関係者・有識者を対象に幅広く行うことが出来た。

②各実施項目で得られた結果・成果を俯瞰・統合した結果分かったこと

各実施項目で得られた結果・成果を俯瞰統合した結果、以下の3点が明らかとなった。

- 1) SNSによるコミュニケーションは、本来グレーゾーンが存在する人間関係に白黒をつけ、内集団と外集団の境界線をクリアに可視化してしまうため、若者同士の信頼関係の醸成のハードルとなっている可能性がある。
- 2) SNSを通じた人間関係が優勢になっている現代だからこそ、リアルな対人関係を育む場である学校の風土が、若者のメンタルヘルスを守り、孤独を予防するために更に重要になっていること。
- 3) 世界的な問題である思春期女子のメンタルヘルスの悪化の背後には、SNSによる人間関係が生活の大きな部分を占める女子を取り巻く社会環境が影響している可能性が大きい事。

③次年度に向けての課題と解決方法の検討

上記3点を踏まえた上で、次年度に向けては、以下の4点が課題となる。

- 1) SNSによるコミュニケーションの実態を若者とのコプロダクションにより更に深堀し、SNSの何が、どのように孤独感の悪化につながる本質的な要素を明らかにすること。その際、対面でのアナログなつながりと、SNSでのデジタルなつながりをキーワードに、問題意識を共有し、議論を進めていく必要がある。
- 2) 1) について、特に女子の孤独感にフォーカスし、社会におけるジェンダーギャップについても孤独感に影響を与える要因として捉える必要がある。この点については、若者へのインタビューによる要因の把握・仮説モデルの構築と、大規模思春期コホートデータによる検証を行う必要がある。
- 3) 学校風土改善プログラムを拡大するに当たって、各校に派遣するコーディネーターの養成を迅速かつ質を担保した形で行う必要がある。次年度より効果検証のフェーズがスタートするため、コーディネーター養成プログラムの実施を速やかに行うこと、また、プログラムに若者とのコプロダクション及び大規模コホートデ

ータによる可視化結果を迅速に反映させていく必要がある。

- 4) 学校風土改善プログラムを進める中で直面した課題を、若者とのディスカッション及びコホートデータによる可視化の際の仮説モデルにも随時フィードバックし、現場と連動した検証を進めていく必要がある。今年度も次年度に引き続き、研究グループ間のディスカッションを頻度高く行い、状況と問題意識を共有しつつ進めていく体制をとる必要がある。

2-5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2024年10月1日～2025年3月31日	東京ティーンコホート調査参加者とのコプロダクションミーティング（全8回）	東京都医学総合研究所	東京ティーンコホート調査に継続して参加している若者（平均年齢21歳）と孤独予防に関する国際的な動向と問題意識を共有し、当事者視点からの研究仮説の批判的検討や、新たな仮説モデル創出に向けたディスカッションを行った。ディスカッションに当たっては、権力勾配に配慮し、言語化しやすいワークを導入するなどの工夫を行った。
2024年10月1日～2025年3月31日	コプロダクショングループチームミーティング（全17回）	オンラインミーティング	若者とのコプロダクションミーティングのプロセスに対するスーパーバイズ、質的データの共有と作業仮説の構築、プロジェクト進捗と計画確認、他グループの進捗・成果共有と統合のためのディスカッション（熊谷・宮本・宮下・山崎）
2024年10月1日～2025年3月31日	コホートデータによる可視化グループミーティング（全6回）	オンラインミーティング	思春期コホートデータ解析結果の共有・バイオマーカー測定（腸内細菌叢・尿中ホルモン等）の進捗管理・若者とのコプロダクショングループでの議論共有・統計解析法の検討（細澤・菊水・宮内・山崎・山口）
2024年10月1日～2025年3月31日	英国キングスカレッジロンドン・コプロダクションチームとの合同ミーティ	オンライン／対面（都医学研：10/24・25・31・11/4・6）	若者コプロダクショングループのプロセス共有・スーパーバイズ・思春期コホートデータを活用した国際共同研究打合せ等（山崎・細澤・西田・Knowles・

	ング (全14回)		Stanyon)
2024年10月1日～2025年3月31日	モデル校（都立小台橋高校・都立立川国際中等教育学校）における、学校風土改善プログラムの導入・実施のための教職員チームとのミーティング（全34回：小台橋高校20回・立川国際中等教育学校14回）	都立小台橋高校・都立立川国際中等教育学校	学校風土改善プログラム導入モデル校において、導入へ向けた教職員との問題意識の共有、学校風土調査の導入支援、生徒チームの募集、コーディネーターの導入、教職員チームと生徒チームとの協働の場の設定等、必要なプロセスについて協議し、プロジェクト進捗の支援を都医学研・東京都と共に行った。
2024年11月～2025年3月	モデル校における生徒チームとのミーティング（全17回：小台橋高校12回・立川国際中等教育学校5回）	都立小台橋高校・都立立川国際中等教育学校	上記モデル校において、生徒チーム募集後、コーディネーターのサポートの下、生徒のニーズに基づき主体的に学校の環境を変えていく活動を進めた。コーディネーターは、①生徒が安心して意見表明できる場づくり、②生徒のニーズを具体化するためのファシリテーション、③チーム外の生徒の意見を集めるためのアンケート等を実施し、生徒発の企画を具体化した上で、④教員チームとの協働の橋渡し・仲介を行い、活動の具体化を進めた。
2024年10月～2025年3月	令和7年度以降プログラム対象校及び所属自治体へ向けた説明会（全17回）	世田谷区教育委員会・校長会 調布市教育委員会 世田谷区立中学4校・調布市立中学4校・都立高校6校	令和7年度以降に学校風土改善プログラムに参加予定の14校（世田谷区立中4校・調布市立中4校・都立高校6校）と各自治体教育委員会に対して、プログラム開始へ向けた調整と、各校管理職・教員コアチームメンバーへの説明会を実施した。
2024年11月	Vikram Patel教授	オンライン	学校風土改善プログラムの開発

18日・12月 23日・2025 年1月8日	スーパービジョ ンミーティング	ミーティング	者であるハーバード大学Vikram Patel教授より、①プログラムの本質的な考え方と内容、②効果検証のデザインとスケジュール、③コーディネーターに求めるコンピテンシーと人材育成プログラムについてスーパービジョンを受け、現在モデル校で進めているパイロットスタディの方向性を確認し、改善を進めた。
2025年3月5 日	効果検証研究デ ザインに関する スーパービジョ ン	オンライン/ 対面（都医学 研）	国立精神神経センター成田室長他2名より、効果検証デザインについてスーパービジョンを受け、最終的な効果検証デザインについて確認を行った。
2024年10月 28日・11月 21日・2月18 日	学校風土測定及 び大規模データ 解析による因果 推論に関するス ーパービジョン	オンライン	心理測定法及び縦断データ解析専門家より、効果検証に用いる学校風土測定指標の開発及び思春期コホートデータによる孤独感とSNSの因果推論分析に関するスーパービジョンを受け、方法論の妥当性について確認した。

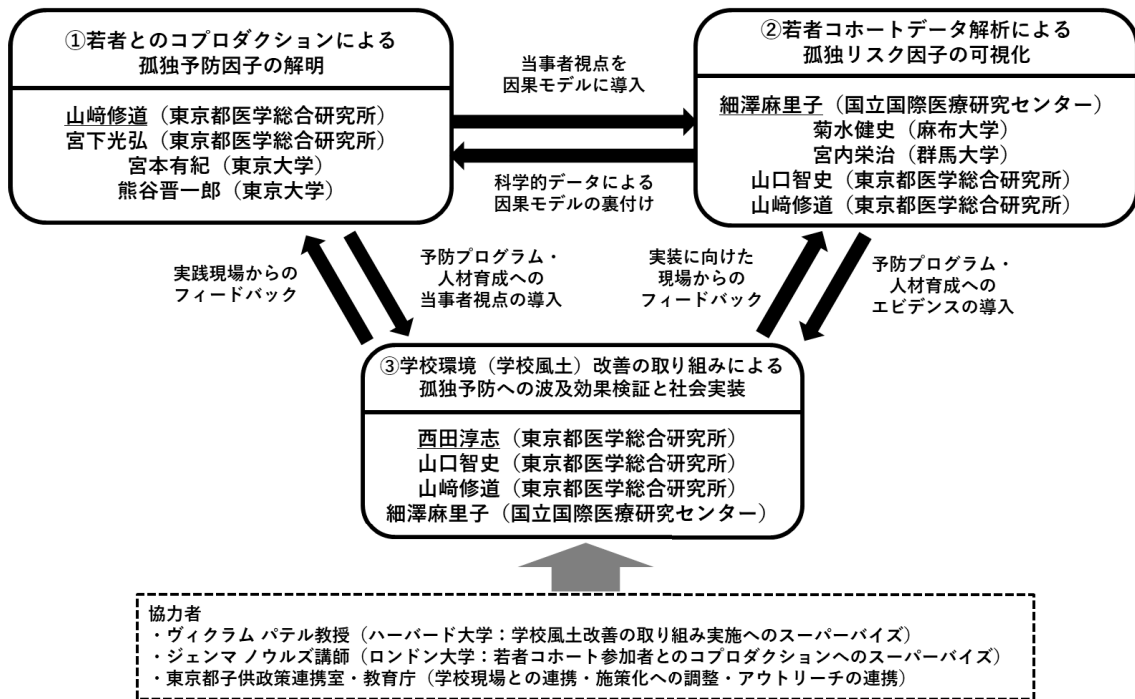
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

- ・東京都子ども未来会議（2024/12/20）を通じて、都民・行政・有識者・メディアへの発信を行った。引き続き、メディアへの発信を継続しており、次年度以降主要メディアでの発信を予定している。
- ・世田谷区希望丘青少年交流センターでのコーディネーター研修会（2024/12/17）を実施し、次年度以降のコーディネーター派遣に向けた人材育成を開始した。次年度開始後速やかにコーディネーターへのトレーニングを開始し、迅速に派遣できる体制を整えていく予定である。コーディネーターのトレーニングプログラムの開発に当たっては、今年度若者とのコプロダクションや大規模コホート解析から得られた結果・知見を導入していく予定である。
- ・東京都子ども政策連携室による「学校の居心地向上検証プロジェクト」が東京都子ども施策のリーディングプロジェクトへ位置づけられ、令和7年度の予算措置が決定した。
- ・都内公立中学校・都立高校計16校の教職員を対象とした説明会及びワークショップを順次実施し、学校風土に関する教職員への普及啓発活動を進めた。上記16校のうち2校については、モデル校として先行してコーディネーターを派遣し、パイロッ

トスタディを進め、生徒による主体的な学校風土改善の実践を進めていった。パイロットスタディの際の課題を解決するに当たっては、若者とのコプロダクションや大規模コホートの解析結果を活用した。

4. 研究開発実施体制

グループリーダー①：山崎 修道（東京都医学総合研究所 社会健康医学研究センター・副参事研究員：臨床心理学・社会疫学）
グループリーダー②：細澤 麻里子（国立国際医療研究センター グローバルヘルス政策研究センター・主任研究員：小児医学・公衆衛生）
グループリーダー③：西田 淳志（東京都医学総合研究所 社会健康医学研究センター長：社会医学・疫学・実装科学）



本研究開発プロジェクトは、以下のマネジメント体制で実施する。その上で、研究代表者が全てのグループに所属し、グループ間の調整・統括を行う体制とする。（上記体制図参照）

①若者とのコプロダクショングループ（グループリーダー：山崎修道）

【研究開発実施機関】東京都医学総合研究所 社会健康医学研究センター（山崎修道・宮下光弘）、東京大学 大学院医学系研究科（宮本有紀）、東京大学 先端科学技術研究センター（熊谷晋一郎）

本グループでは、若者とのコプロダクションを通じて、当事者の視点からみた若者が孤独に陥るメカニズムを明らかにし、孤独の一次予防のあり方について定式化する。本グループで得られた当事者視点に基づく知見を、後述する若者コホートデータ解析による孤独のリスク因子可視化（研究開発要素②）、及び学校環境（学校風土）改

善の取り組みによる孤独予防への波及効果検証と社会実装（研究開発要素③）に随時導入することで、若者の当事者視点とのミスマッチを防ぎ、最適な開発を進められるようフィードバックを行う。

②若者コホートデータによる可視化グループ（グループリーダー：細澤麻里子）

【研究開発実施機関】国立国際医療研究センター グローバルヘルス政策研究センター（細澤麻里子）、麻布大学 獣医学部（菊水健史）、群馬大学 生体調節研究所（宮内栄治）、東京都医学総合研究所 社会健康医学研究センター（山崎修道・山口智史）

本グループでは、大規模出生コホートデータを用いた孤独のリスク因子の可視化を通じて、若者が孤独に陥るメカニズムを量的データ解析から明らかにし、孤独の簡易可視化法を開発する。前述の若者とのコプロダクションによる当事者視点に基づいた知見（研究開発要素①）と統合し、因果関係ダイアグラムによるモデル化とビッグデータによる検証を行う。得られた結果は学校環境改善の取り組みと人材育成プログラムの開発（研究開発要素③）に随時導入し、取り組みの精度と効果を高める。

③学校風土改善による孤独予防の社会実装グループ（グループリーダー：西田淳志）

【研究開発実施機関】東京都医学総合研究所 社会健康医学研究センター（西田淳志・宮下光弘・山口智史・山崎修道）、国立国際医療研究センター グローバルヘルス政策研究センター（細澤麻里子）

本グループでは、学校風土改善プログラムが、孤独感を予防する効果を持つことを検証する。生徒とのコプロダクションによりプログラムを進め、学校風土の改善を数量的にモニタリングしながら、PDCAサイクルを実施する。効果検証プロセスを概念実証の場と位置づけ、コプロダクション・ワーキングチーム（研究開発要素①）および若者コホートによるリスク因子の可視化（研究開発要素②）に対して、随時現場からのフィードバックを行う。また、東京都教育庁・子供政策連携室と連携して、本事業の成果のアウトリーチや都立学校全体への普及啓発を進める。

5. 研究開発実施者

①若者とのコプロダクショングループ（グループリーダー：山崎修道）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
山崎 修道	ヤマサキ シュウド ウ	東京都医学総合 研究所	社会健康医学 研究センター 心の健康ユニ ット	副参事研究員
宮本 有紀	ミヤモト ユキ	東京大学	大学院医学系 研究科	准教授
熊谷 晋一郎	クマガヤ シンイチ ロウ	東京大学	先端科学技術 研究センター	教授
宮下 光弘	ミヤシタ ミツヒロ	東京都医学総合 研究所	社会健康医学 研究センター 心の健康ユニ ット	副参事研究員
周 瑞	シュウ ズイ	東京都医学総合 研究所	社会健康医学 研究センター 心の健康ユニ ット	博士研究員
呉 心之	ゴ シン ユキ	東京大学	大学院医学系 研究科	研究補助員

②若者コホートデータによる可視化グループ（グループリーダー：細澤麻里子）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
細澤 麻里子	ホソザワ マリコ	国立国際医療研 究センター	グローバルヘル ス政策研究 センター	主任研究員
菊水 健史	キクスイ タケフミ	麻布大学	獣医学部	教授
宮内 栄治	ミヤウチ エイジ	群馬大学	生体調節研究 所	准教授
山口 智史	ヤマグチ サトシ	東京都医学総合 研究所	社会健康医学 研究センター 心の健康ユニ ット	研究員

山崎 修道	ヤマサキ シュウド ウ	東京都医学総合 研究所	社会健康医学 研究センター 心の健康ユニ ット	副参事研究員
周 瑞	シュウ ズイ	東京都医学総合 研究所	社会健康医学 研究センター 心の健康ユニ ット	博士研究員

③学校風土改善による孤独予防の社会実装グループ（グループリーダー：西田淳志）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
西田 淳志	ニシダ アツシ	東京都医学総合 研究所	社会健康医学 研究センター 心の健康ユニ ット	センター長
山崎 修道	ヤマサキ シュウド ウ	東京都医学総合 研究所	社会健康医学 研究センター 心の健康ユニ ット	副参事研究員
宮下 光弘	ミヤシタ ミツヒロ	東京都医学総合 研究所	社会健康医学 研究センター 心の健康ユニ ット	副参事研究員
山口 智史	ヤマグチ サトシ	東京都医学総合 研究所	社会健康医学 研究センター 心の健康ユニ ット	研究員
細澤 麻里子	ホソザワ マリコ	国立国際医療研 究センター	グローバルヘル ルス政策研究 センター	主任研究員
周 瑞	シュウ ズイ	東京都医学総合 研究所	社会健康医学 研究センター 心の健康ユニ ット	博士研究員

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2024年 10月25日	都医学研セミナー	東京都 医学総 合研究 所	東京都 医学総 合研究 所	20名	英国キングスカレッジロンドンGemma Knowles講師・Daniel Stanyon研究員らと交えて、若者とのコプロダクションによる日英共同研究（思春期メンタルヘルスのジェンダーギャップについて）に関するセミナーを行い、これまでの成果を広く周知した。今後の共同研究について進め方等具体的なディスカッションを行った。
2024年12 月20日	東京都子ども未来会議	東京都 子供政 策連携 室	東京都 庁	委員7名 東京都知 事 都庁関係 者等 オンライ ン配信	東京都知事参加の下、「子供が笑顔で子育てが楽しいと思える社会」の実現に向けて、海外等の先進事例も踏まえ、従来の枠組みにとらわれない幅広い視点で議論をすることを目的とする会議体（座長：秋田喜代美 学習院大学教授）。東京都子供政策連携室が所管。当会議において、西田グループリーダーより、「学校の居心地と生徒のメンタルヘルスとの関係」についてプレゼンテーションを行い、都民・行政・有識者へ向けた発信を行った。
2024年12 月17日	学校風土改善コーディネーター研修ワークショップ（	世田谷 区希望 丘青少 年交流	世田谷 区希望 丘青少 年交流	30名	「若者との共同創造による学校居心地向上プロジェクトについて」とのテーマで、学校風土改善コ

		センター	センター		一ディネーターの派遣元である世田谷区希望丘青少年交流センターにて、コーディネーター候補であるユースワーカーに、講義とグループワークによる研修を行った。研修では、コーディネーターとして学校へ外部から入ることの意義や価値、また具体的な懸念や不安についても可視化し、次年度以降の研修において強化すべきポイントを明確化出来た。
2024年10月26日	都立小台橋高校教職員対象ワークショップ(3時間)	東京都・都医学研・都立小台橋高校	都立小台橋高校	40名	モデル校である都立小台橋高校の教職員を対象に、講義とグループワークによる研修を行った。講義では、熊谷・綾屋より、学校での共同創造を進めていく上で留意すべきポイントについて確認し、コーディネーターである世田谷区希望丘青少年交流センターの下村より、コーディネーターの立場と子どもの権利についての考え方について確認した。その上で、学校風土改善プログラムの重要な要素である意見箱の活用方法について、事例に基づいたワークを行い、プログラムに対する教職員の理解を深めることが出来た。
2024年12月25日	都立立川国際中等教育学校教職員対象ワークショップ(3時間)	東京都・都医学研・都立立川	都立立川国際中等教育学校	30名	モデル校である都立立川国際中等教育学校の教職員を対象に、講義とグループワークによる研修を行った。講義では、熊谷

		国際中等教育学校		<p>より、学校での共同創造を進めていく上で留意すべきポイントについて確認し、コーディネーターである世田谷区希望丘青少年交流センターの下村より、コーディネーターの立場と子どもの権利についての考え方について確認した。その上で、学校風土改善プログラムの重要な要素である意見箱の活用方法について、事例に基づいたワークを行い、プログラムに対する教職員の理解を深めることが出来た。</p>
--	--	----------	--	---

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

- 論文プレスリリース (2件: 「コロナ禍でも居心地の良い学校生活を送っている子どものメンタルヘルスは維持ー平時から居心地の良い学校風土の構築が求められるー」「思春期に男女のメンタルヘルス格差が拡大ー日英両国の出生コホート研究から明らかにー」) を通じて、研究成果を発信した。
- 東京都子供政策連携室ウェブサイトを通じて、学校風土改善プロジェクト (学校の居心地向上検証プロジェクト) の取り組みに関する情報発信を行った。((2) 参照)
- 当事者研究に関するシンポジウムを通じて、当事者との共同創造に関する普及啓発活動を行った。((3) 参照)

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

なし

(2) ウェブメディアの開設・運営

- 学校の居心地向上 東京都子供政策連携室ウェブサイト
<https://www.kodomoseisaku.metro.tokyo.lg.jp/jigyo/suisin-team/gakkouigokochikoujo>
- コロナ禍でも居心地の良い学校生活を送っている子どものメンタルヘルスは維持ー平時から居心地の良い学校風土の構築が求められるー 東京都医学総合研究所ウェブサイト (2024.12.20)
https://www.igakuken.or.jp/topics/2024/1220_1.html
- こども未来アクション2025 東京都子供政策連携室ウェブサイト (2025.1.31)
デジタルブック 学校の居心地向上 (pp. 92-96)
<https://www.spt.metro.tokyo.lg.jp/kodomoseisaku/book/kodomo-mirai-action2025/#page=95>
- 第13回こども未来会議 東京都子供政策連携室ウェブサイト (2024.12.20)
ダイジェスト動画: <https://www.youtube.com/watch?v=zN24TDDYatY>
会議映像: https://www.youtube.com/watch?v=61qeF_6NMBk&t=1s
開催概要: <https://www.metro.tokyo.lg.jp/information/press/2024/12/2024121304>
- 第13回こども未来会議 学校の居心地と生徒のメンタルヘルスとの関係 東京都医学総合研究所ウェブサイト
<https://www.igakuken.or.jp/topics/2024/1220.html>
- 【プレスリリース】 思春期に男女のメンタルヘルス格差が拡大 東京大学医学部附属病院ウェブサイト (2025.3.19)
<https://www.h.u-tokyo.ac.jp/press/20250319-1.html>
- 思春期に男女のメンタルヘルス格差が拡大ー日英両国の出生コホート研究から明らかにー 東京都医学総合研究所ウェブサイト (2025.3.19)
<https://www.igakuken.or.jp/topics/2025/0319.html>
- 【記者発表】 思春期に男女のメンタルヘルス格差が拡大ー日英両国の出生コホート研究から明らかにー 東京大学ニューロインテリジェンス国際研究機構ウェブサイト (2025.3.19)
https://ircn.jp/pressrelease/20250319_kiyoto_kasai?fbclid=IwY2xjawKMt7pleHRuA2FlbQ

[IxMABicmlkETE3aThqWjdmN0trYWxsYmFsAR5k2vwzHIjWyjiniBFjGAqmjoq31mW_XryBZKaW4gTmmJ5avcHx4WaVtZZ29cA_aem_qw_PpgsrDGe6G6IMDc9Jvw](#)

(3) 学会 (6-4.参照) 以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・熊谷晋一郎. 当事者研究から学ぶインクルージョン：高信頼性組織・共同創造・アンチスティグマ. 応用脳科学アカデミーアドバンスコース2「脳を育む」(第2回), 2024年10月2日(水), 株式会社NTTデータ経営研究所, 東京都千代田区.
- ・熊谷晋一郎. 自立とは. 第60回全国知的障害福祉関係職員研究大会, 2024年10月3日(木)15:20~17:00, 福井市フェニックス・プラザ, 福井県福井市.
- ・熊谷晋一郎・畑田裕二. ことばを創るーべてるの家の実践に着目して. べてるの家の創立40周年記念式典, 2024年10月4日(金), 浦河町総合文化会館, 北海道浦河市.
- ・國分功一郎・熊谷晋一郎. 責任、帰責性、「自己責任」. 東京大学履修証明プログラム「職域・地域架橋型ー価値に基づく支援者育成」TICPOC 2024, 2024年10月6日(日), 東京大学医学部鉄門講堂, 東京都文京区.
- ・熊谷晋一郎. 安全文化と当事者研究. 日本障害者歯科学会2024年度専門医基本研修会, 2024年10月8日(火), online.
- ・熊谷晋一郎. 差別や偏見のない共生社会の条件. 障害者に対する差別や偏見のない共生社会の実現に向けた対策推進本部幹事会, 2024年10月21日(月), online.
- ・熊谷晋一郎. 病気や障害に関わる「スティグマ」への対処法：集団間接触理論を中心に. 西東京糖尿病心理と医療研究会, 2024年10月30日(水), online.
- ・熊谷晋一郎. 当事者研究から見た／に学ぶケア. 日本スピリチュアルケア学会第17回学術大会, 2024年11月2日(土), 東京大学本郷キャンパス三番大教室, 東京都文京区.
- ・熊谷晋一郎. 当事者研究の未来. 特定非営利活動法人ラルゲット創立10周年記念イベント「フル・インクルーシブ教育と『当事者研究』の未来」, 2024年11月9日(土), 大阪私学会館, 大阪府大阪市.
- ・熊谷晋一郎. 当事者研究と共同創造. 日本発達神経科学会第13回学術集会シンポジウム3「発達障害研究における倫理」, 2024年11月10日(土), 国立障害者リハビリテーションセンター学院1階講堂, 埼玉県所沢市.
- ・熊谷晋一郎. 当事者研究. 日本重症心身障害福祉協会西日本施設協議会総会, 2024年11月14日(木), online.
- ・熊谷晋一郎. 障害の社会モデルと人権モデルの相補性. 東京大学医学部医学のダイバーシティ教育研究センター第7回TICPOC一般公開シンポジウム「TICPOC実践フェーズにおける理論と現場の課題～トラウマインフォームドケア・共同創造・組織変革のこれから」, 2024年11月17日(日), online.
- ・熊谷晋一郎. 組織マネジメント. 法務省矯正研修所上部幹部マネジメント研修, 2024年11月19日(火), 法務省矯正研究所, 東京都昭島市.
- ・熊谷晋一郎. 障害インクルージョン. 東京大学大学院新領域創成科学研究科スマートシティスクール2024年度第6期, 2024年度11月20日(水), 東京ミッドタウン八重洲東京大学八重洲アカデミックコモンズ, 東京都中央区.
- ・熊谷晋一郎. 謙虚なリーダーシップが組織にもたらすもの. 法務省矯正研究所矯正

- 施設中級幹部研修, 2024年11月26日(火), online.
- ・熊谷晋一郎. 当事者研究の社会実装. 筑波大学インクルーシブ・リーダーズ・カレッジ, 2024年12月9日(月), online.
 - ・熊谷晋一郎. 当事者研究からみるインクルーシブな組織づくり. TOKYO障害者マッチング応援フェスタ, 2024年12月17日(火), 東京ビッグサイト南3ホール, 東京都江東区.
 - ・熊谷晋一郎. 当事者研究ワークショップ. 「夢・志」ワークショップ: 当事者研究の視点から, 2024年12月21日(土), 山口県セミナーパーク, 山口県山口市.
 - ・熊谷晋一郎. 当事者研究と共同創造. 第10回フォーラム地球学の世紀, 2025年1月21日(火), 総合地球環境学研究所地球研ホール, 京都府京都市.
 - ・熊谷晋一郎・綾屋紗月. 当事者研究. 対話のちから vol.2 〈わたし〉と〈あなた〉のあい vol.2, 2025年1月12日(日), 東京大学駒場 I キャンパス18号館ホール, 東京都目黒区.
 - ・熊谷晋一郎. 発達障害のある人の自立を支えるとは: 当事者研究からみえてきたもの. NPO法人あくしゅ&自閉症eサービス山口発達障害支援オンラインセミナー, 2025年1月31日(金), online.
 - ・Ayaya, S., & Kumagaya, S. Introduction to Tōjisha-Kenkyū---Epistemic Justice, Self-Advocacy, and Coproduction. UCL Centre for Research in Autism & Education Webinar, February 6, 2025, online.
 - ・熊谷晋一郎. 自立と心理的安全について. 社会福祉法人麦の子会職員向け研修, 2025年2月25日(火), online.
 - ・綾屋紗月・熊谷晋一郎. 令和6年度津久井やまゆり園職員向けASD講演. 2025年2月26日(水), 津久井やまゆり園会議室, 神奈川県相模原市.
 - ・熊谷晋一郎. 高信頼性と共同創造. ソフトバンクEBC当事者研究講演会&ワークショップ, 2025年3月10日(火), 東京大学先端科学技術研究センター3号館南棟262-263, 東京都目黒区.
 - ・熊谷晋一郎. 失敗が許されない組織に求められる文化 —高信頼性組織研究を参考に, 東京都児童相談所メンタルヘルス研修, 2025年3月11日(火), 東京都児童相談センター6階大研修室, 東京都新宿区.
 - ・熊谷晋一郎. 組織マネジメント. 法務省矯正研修所上級管理科研修, 2025年3月12日(水), 法務省地下1階大会議室, 東京都千代田区.
 - ・熊谷晋一郎. 障害インクルーシブな組織の条件: 企業・大学・行政機関を対象に. 2025年3月17日(月), 東京大学本郷キャンパス山上会館, 東京都文京区.
 - ・熊谷晋一郎. 最高裁判決から考える障害分野における婚姻の自由. 東京大学多様性包摂共創センター第2回SOGIイベント「同性婚訴訟から考える結婚の平等とセクターをこえての協働: 誰もが自分らしく生きられる社会を目指して」, 2025年3月17日(月), 東京大学情報学環・福武ホール 地下2階福武ラーニングスタジオ1・2・3, 東京都文京区.
 - ・Kumagaya, S. Tōjisha-Kenkyū on Autism: Participatory Autism Research and Neurodiversity in Japan. Towards the Future of Communication Creating an Inclusive World with Neuro/Bioscience and Engineering Technologies, March 28, 2025, Sendai Ryokusaikan Visitor Center, Miyagi, Japan.

- ・熊谷晋一郎・並木重宏・綾屋紗月・喜多ことこ.HOWS DESIGNワークショップ.
KOKUYO Diversity & Inclusion & Innovation FES, 2024年12月3日(火), コクヨ品川
オフィスTHE CAMPUS, 東京都港区

6-3. 論文発表

(1) 査読付き (7 件)

●国内誌 (1 件)

- ・細澤麻里子 総説：コロナ禍が思春期世代のメンタルヘルスに与えた影響
Brain and Nerve 77: 59-65

●国際誌 (6 件)

- ・ Yamaguchi, S., DeVlyder, J., Yamasaki, S., Ando, S., Miyashita, M., Hosozawa, M., Baba, K., Niimura, J., Nakajima, N., Usami, S., Kasai, K., Hiraiwa-Hasegawa, M., & Nishida, A. (2024). Protective role of school climate for impacts of COVID-19 on depressive symptoms and psychotic experiences among adolescents: a population-based cohort study. *Psychological Medicine*, 54(16), 1–8. Advance online publication. <https://doi.org/10.1017/S0033291724003192>
- ・ Knowles, G., Stanyon, D., Yamasaki, S., Miyashita, M., Gayer-Anderson, C., Endo, K., Usami, S., Niimura, J., Nakajima, N., Baba, K., Richards, T. S., Kitisu, J., Hashi, A., Clement-Gbede, K. S., Tettey, N., Davis, S., Lowis, K., Buckley, V., Moreno-Agostino, D., Putzgruber, E., ... Tokyo Teen Cohort Young Persons Advisory Group (2025). Trajectories of depressive symptoms among young people in London, UK, and Tokyo, Japan: a longitudinal cross-cohort study. *The Lancet Child & adolescent health*, 9(4), 224–233. [https://doi.org/10.1016/S2352-4642\(25\)00059-8](https://doi.org/10.1016/S2352-4642(25)00059-8)
- ・ Kumagaya, S., Matsuo, A., Yui, N., Ayaya, S., Kawahara, T., Kashiwabara, K., Goro Koto, G., & Kamioka, H. (2025). Fostering employee engagement and mental health: Impact of psychological safety, humble leadership, and knowledge sharing in the Japanese public sector. *International Review of Public Administration*, 1-24.
- ・ Ono K, Tokushige M, Hiratani N, Kaneko K, Hamamura T, Miyamoto Y, et al. Reliability and Validity of the Japanese Version of the Internet Gaming Disorder Scale for Children (IGDS-C). *Neuropsychopharmacology Reports*. 2025;45(1):e12518. <https://doi.org/10.1002/npr2.12518>
- ・ Chiba R, Miyamoto Y, Funakoshi A, Hirota M, Hayashi Y, Yamanouchi T, Mitsui M, Inagaki A, Cheng ST. Benefit Finding and Growth Among Family Caregivers of Individuals With Mental Illness: A Scoping Review. *Journal of Family Nursing*. 2025;0(0). doi:10.1177/10748407241309138
- ・ Kotake R, Otsu E, Asaoka H, Sawada U, Miyamoto Y, Nishi D. Effect of video-based trauma-informed care training for psychiatric nurses: a nonrandomized controlled trial. *Psychiatry Clin Neurosci Rep*. 2025; 4:e70052. <https://doi.org/10.1002/pen5.70052>

(2) 査読なし (1 件)

- ・熊谷晋一郎. (2025). 大学在学中の健康維持・管理の課題. *総合リハビリテーション*, 53(3), 273-277.

6-4. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

(2) 口頭発表 (国内会議 1 件、国際会議 0 件)

- ・山口智史 学校風土がコロナ禍における子どもの援助希求行動に与えた行動：思春期コホート研究による検証 日本健康相談活動学会第21回学術集会 (2025年3月 東京)

(3) ポスター発表 (国内会議 2 件、国際会議 0 件)

- ・山口智史、山崎修道、安藤俊太郎、宮下光弘、細澤麻里子、馬場香里、新村順子、中島直美、西田淳志 コロナ禍が思春期の子供の抑うつ症状に与えた影響と学校の居心地による調整効果 日本学校メンタルヘルス学会第28回大会 (2024年11月 沖縄)

6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (8 件)

- ・FNNプライムオンライン：不登校だった生徒たちが通う「チャレンジスクール」ソーシャルワーカー配置の“カフェ”も 生徒主導の「居心地向上委員会」とは？ <https://www.fnn.jp/articles/-/785276> (2024.11.11)
- ・都政新報：都子供政策連携室／学校運営に生徒の意見反映／「居心地」向上へアイデア続々 https://www.toseishimpo.co.jp/modules/news_detail/index.php?id=11174 (2024.12.6)
- ・教育新聞：不登校低年齢化で「学校の居心地向上」図る 都こども未来アクション <https://www.kyobun.co.jp/article/2025021004> (2025.2.10)
- ・教育新聞：思春期のメンタルヘルスに男女格差 成長に伴い女子の「抑うつ」重く <https://www.kyobun.co.jp/article/2025031904> (2025.3.19)
- ・思春期の抑うつ症状、女子は男子より重い・・・東大ら日英共同研究 リセママ教育業界ニュースウェブサイト (2025.3.21) <https://resemom.jp/article/2025/03/21/81342.html>
- ・都医学総合研究所と東大など、日英両国の若者におけるメンタルヘルスの男女格差について国際比較研究を実施 日本経済新聞電子版 (2025.3.19) https://www.nikkei.com/article/DGXZRSP688472_Y5A310C2000000/
- ・思春期の「抑うつ症状」は男子よりも女子で重いと判明、日・英調査でー都医学研ほか QLifePro 医療ニュース (2025.3.27) <https://www.qlifepro.com/news/20250327/depression-adolescence.html>
- ・【健康】学校の居心地がメンタルヘルスに重要 十勝毎日新聞電子版 (2024.3.28) <https://kachimai.jp/article/index.php?no=20250326123226>

(2) 受賞 (1 件)

- ・山口智史 若手研究者奨励賞 日本健康相談活動学会第21回学術集会

(2) その他 (2 件)

- ・熊谷晋一郎. (2024). 当事者研究と共同創造. 小川真里子・鶴田想人・弓削尚子 (編著)ジェンダード・イノベーションの可能性, pp. 215-236, 明石書店.
- ・熊谷晋一郎. (2024). 当事者研究とコ・プロダクション. 佐藤邦政・神島裕子・榊原英輔・三木那由他 (編著)認識的不正義ハンドブック：理論から実践まで, pp. 204--218, 勁草書房.

6-6. 知財出願

(1) 国内出願 (0 件)

なし

(2) 海外出願 (0 件)

なし